

はじめに

われわれの共同研究は1976年に開始され、その成果として発行している『研究年報』が最初に刊行されたのは1982年である。それ以来、共同研究のメンバーは、年に2回行われる研究合宿や月に1回程度行われる研究会において報告を行い、そこでの議論を反映させた原稿を毎年『研究年報』としてまとめてきた。

これまでの共同研究のテーマを概観すると、1980年代は主に「国民スポーツ研究の課題と方法」をテーマとし、アメリカ、イギリス、ドイツ、フランスなど——スポーツに関する運動や政策ではわが国をリードしてきた国々——のスポーツ事情や研究動向などから、「国民スポーツ」を成立させるための条件や方法、そしてそれらを研究していく研究手法の模索がされている。その背景には「民活路線が登場し、我が国のスポーツ政策は『公』から『民』へシフトし始め、改めて『国民スポーツ』の必要性が社会的に認識されざるを得なかった時代」があったと、21号の「はじめに」の中で早川武彦教授（現：名誉教授）は当時を振り返って述べている。今でこそ「スポーツによる地域活性化」や「総合型地域スポーツクラブ」といった言葉は当たり前のように普及しているが、「体育」という枠組みを越えてスポーツをとらえにくかった時代において、広く、国内外にアンテナを張って先端的研究動向を把握しようとしてきた共同研究は、この分野の研究にとってインパクトを与えたものと考えられる。

1990年代に入ると「大企業のスポーツ参入とスポーツ運動の理論」（1990年）、「転換期のスポーツ—日本とヨーロッパ—」（1991年）、「スポーツの市場化とスポーツ権」（1992年）、「スポーツ社会学の新展開」（1993年）、「『Sport for All』の思想と運動」（1994年）、「近代スポーツから現代スポーツへ」（1995年）、「スポーツ社会学の対象と方法」（1996年）というテーマが設定されており、世界的な衛生放送網の確立とスポーツの市場化の進行が加速化されていく中で、スポーツの現場に生じる現象や課題をいかに捕捉し、描き出すことができるのかについて議論を積み重ねている様子が分かる。

「……ものと考えられる」や「……様子が分かる」と上で表現したのは、現在の共同研究のメンバーは、1990年代後半以降に参加した者のみになってしまい、共同研究を開始した時を知る「先輩方」は、今年の3月に退職された上野卓郎教授を最後に、いなくなってしまったからである。

本誌は、2003年より「内容や編集・発行主体を分かりやすくするために」誌名を変更し、『一橋大学スポーツ研究』として発行するようになったが、各号に付されるナンバーは、1982年からの通番となっている。このことは、共同研究の成果物としての連続性を表しているとともに、現在の研究成果がこれまでの共同研究における蓄積の上に重ねられるものであるということをも意味する。そのような点において、今号の「グローバル化とスポーツの変容」というテーマのもとに行われた共同研究は、退職された「先輩方」との共同作業でもあると言えよう。今年の4月には新たなるメンバーとして鈴木直文講師を迎え、組織としてさらに若返ることとなったが、一橋のスポーツ研究のこれまでの蓄積を大切にしつつ、さらなるチャレンジを続けていきたいと考えている。

2010年9月22日

一橋大学スポーツ科学研究室室長 岡本 純也